カットフルーツ

絶氷のシア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
カットフルーツ

【Ｎコード】
Ｎ３５６３Ｔ

【作者名】
絶氷のシア

【あらすじ】
今回は憂紬に挑戦。自分の好きな2キャラです。うまく書けてないかもしれませんが読んでいただけたら嬉しいです！！

こんにちは、平沢憂です。
今日は日曜日。
私は晩ご飯のお買い物をするために行き慣れている近くのスーパーに来ていました。
今晩はカレーにしたいと思っています♪
「えーと、人参買って玉ねぎ買ってじゃがいも買って…」
買うものが少し多かったのもあって私は早い時間に買い物をしていました。
時間帯のせいか夕方にはお客さんで溢れている売り場も、今は少ないみたいです。
「あとは…あれ？」
と。
ここで見慣れた後ろ姿を発見しました。
あの後ろ姿は…紬さん？
でも紬さんは電車通学なので休日にはこの辺りには来ないはずなんですけど。
ともあれ、声をかけなきゃ謎は解けませんので、私は紬さんに声をかけることにしました。
「こんにちは。紬さん」
「あら？憂ちゃん♪憂ちゃんもお買い物かしら？」
「はい♪でも休日にこちらにいらっしゃるなんてなにかあったんですか？」
「ええ、学校に用事があってね。今はその帰りなの♪」
なるほど、と思わず頷きました。
確かに3年生ともなると、受験や就職の活動で色々と忙しくなってきます。
今日紬さんが学校に来たのもその一貫なのでしょう。

よく見れば紬さんは桜高の制服を身に纏っていました。
それから私と紬さんは他愛ない会話を交わしながらスーパーの中を歩きます。
ふと、紬さんが足を止めました。
何か見つけたのでしょうか、紬さんの目は一点に集中していました。
その視線を追ってみるとそこにはチラシが一枚。
「カットフルーツ体験コーナー…ですか」
私は大きい文字のところだけ読み上げると、小さな文字で書いてある詳しい説明を読んでみました。
『お一人様５００円でカットフルーツが体験できます。道具やフルーツもこちらでご用意させていただきますので、ご希望のお客様はお近くの店員までお声かけくださいませ』
ふむふむ。
どうやらこの企画は期間限定らしく、ちょうど私たちはその期間に立ち会ったみたいでした。
なんだか面白そうです♪
「う、憂ちゃんっ！私これやってみたい♪」
すると紬さんが目をキラキラ輝かせて私に聞いてきました。
わぁ～♪
紬さんてこんな表情もするんですね♪
可愛い～♪
「いいですよ～♪あ、でも荷物が…」
中にはお姉ちゃんに頼まれていたアイスも入っていたのでどうしようかと悩んでいると…
「あっ！このチラシに『ご購入された商品はこちらでお預かり致します』て書いてあるわ♪」
「なるほど…じゃあ大丈夫ですね♪」
私たちはまずレジでお会計を済ませてるためにレジへと向かいました。
お会計を済ませてレジの人に聞いたところ、カウンターへと案内さ

れます。
ここでカットフルーツ体験のお会計を済ませるみたいです。
私たちは一人５００円を払ってから購入した商品をカウンターで預かってもらい、カットフルーツの場所へと案内されました。
見たところ一つの部屋になっているみたいで、窓から中が見えるようになっていました。
他のお客さんに見られちゃうのはちょっぴり恥ずかしいです…
店員さんはある程度の説明をし終えて自分の持ち場へと戻っていきました。
私たちは顔を見合わせて頷きます。
そしてカットフルーツの部屋へと入りました。
「わぁ…すごい！」
紬さんは両手を合わせて感嘆の声をあげます。
中にはテーブルが設置されていてその上にはまな板や包丁といったいろんな器具が用意されていました。
他にも小さな冷蔵庫があって、私たちは早速中身を確認します。
開けるとそこには二種類のフルーツが並んでいました。
一つは私たちにも馴染み深い『パイナップル』。
もう一つは…なんでしょう？
ただただ白くて丸いものが置いてありました。
これもフルーツなのでしょうか？
紬さんの方を見ると、紬さんも首を傾げていて解らないみたいです。
そういえば店員さんが中に詳しい説明が書いてある紙があるので読んでみてください、て言っていたのを思い出しました。
ぐるりと一周見回してみると壁に何枚かの紙が貼ってあるのを見つけます。
読んでみるとこの白くて丸いフルーツは『ハネジューメロン』というメロンの一種みたいでした。
詳しく読んでみるとメキシコ産のメロンで名前の由来は『ハネ→ハニー→蜜』と『ジュー→雫』のようで、直訳すると『蜜の雫』とい

う意味らしいです。
甘みがあってみずみずしいメロンと書いてありました。
「早くやりましょう！憂ちゃん♪」
「そうですね♪じゃあまず準備を…」
私はパイナップルとハネジューメロンを冷蔵庫からとりだして水道で洗います。
結構パイナップルがチクチクしていて洗うのに時間がかかってしまいました。
その間に紬さんには包丁やまな板を準備してもらいました。
洗い終わった私は予め店員さんから渡してあった透明なトレイをテーブルの上に並べます。
これで準備は完了しました♪
「それじゃあ始めましょう！」
「はいっ！」
私たちは手を洗ってアルコール消毒をしてからビニール手袋をはめました。
まずはパイナップルからカットしたいと思います。
包丁を手にとって、ヘタの部分と下の部分を切ります。
そうしたら回りの皮を剥いていきます。
これでパイナップルの中身が現れました。
縦に４分の１にカットして、中心にある芯を切り取ります。
あとは４分の１カットを適度な大きさにカットしていけば完成です。
「思ったよりうまくできたような気がするわ♪」
「そうですね♪」
出来上がったパイナップルをトレイに盛り付けていきます。
トレイには二ヶ所の窪みがあって、もう一ヶ所はメロンを入れるみたいです。
「よ～し！この調子で頑張りましょう！」
「お～♪」
勢いにのって次はハネジューメロンに移行しました。

まずこちらは2分の1にカットします。
そうしたら中身の種の部分を取ります。
それが終わったら更に2分の1にカットします。
と。
「いたっ！」
突然小さな悲鳴が。
見てみると紬さんが包丁で指を切ってしまったみたいでした。
「大丈夫ですか？」
私はすぐに駆け寄り、紬さんのビニール手袋を外して状態を確認します。
良かった…そんなに深くは切っていないみたいです。
見ると人指し指の先の方から血が出ていました。
そして。
パクン。
「きゃっ！？う、憂ちゃん！？」
私は紬さんの人差し指を口でくわえていました。
その間に私は手元にあった鞄の中から絆創膏を取り出します。
血の勢いが弱まるのを見計らって私は口を人差し指から離して、傷口に絆創膏を貼り付けてあげました。
「あ、ありがとう…」
「いえいえ♪」
気のせいでしょうか？
紬さんの頬が赤いような…
「そ、それにしても手慣れてるのね」
「いえそんな…昔お料理を初めたての頃は指を切るなんて日常茶飯事でしたから」
「本当に？全然そういう風には見えないわ」
確かに今は慣れてしまったのでそういう風には見えないのかもしれません。
でも最初の頃は本当に指を切ったりして大変でした。

さてさてカットフルーツに戻りましょう。
４分の１にカットしたハネジューメロン。
それを今度は皮を剥いてある程度の大きさに切り、トレイに盛り付けて完成です♪
「できたー！あ、そうだ！憂ちゃんちょっと…」
「はい？」
紬さん小声で私に耳打ちします。
「いくわよ？せーの…」
「「上手に出来ましたーっ！！」」
や、やっぱりちょっと恥ずかしいです…
でも、初めて作ったのに結構うまく作れた気がします。
トレイにのせたフルーツを持って私たちはカットフルーツの部屋をあとにしました。
カウンターに行って預かってもらっていた商品を受け取り、スーパーを出ます。
「楽しかったわ～♪」
「そうですね～♪紬さんはこれからどうするんですか？」
「う～ん、どうしましょう？あら？」
そこで紬さんの携帯が鳴り響きます。
メールでしょうか？
紬さんはにっこりと微笑んで私に携帯の画面を見せました。
『ムギちゃ～ん♪今りっちゃんが遊びに来てるんだけどムギちゃんも来な～い？唯』
うふふ♪
お姉ちゃんたら♪
「憂ちゃん♪お邪魔してもいいかしら？」
「ええ♪どうぞ♪」
私と紬さんは同じ方向へと足を向けました。
とびっきりのお土産を持って。
終わり

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3563t/

カットフルーツ

2011年6月3日05時03分発行